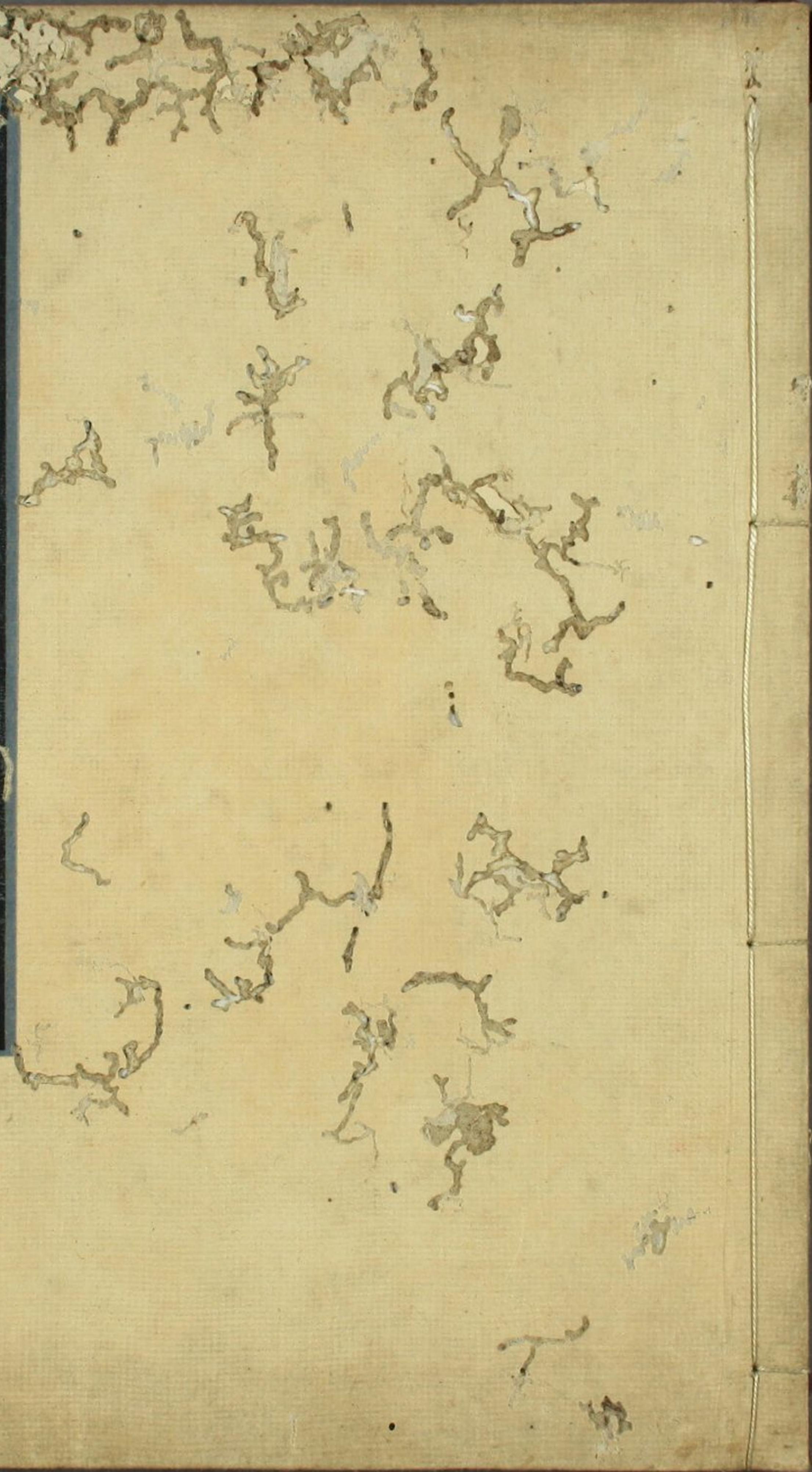


古今和歌集正義  
冬



7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 6



古今和詩集正義卷第六

冬秋

題

よみぐらす



大田川よりきわどく神無月とれのあそびゆ行く  
きの川を又もは辯をこう纖出こも是を歎ひて  
ひち常てゑはあくてあれのあを經緯うきりと云秋幼  
小童川をみるゑたゞか神無の三室ひづけゆふ  
お葉よ大坂乎吉城來者ニ上爾黄葉流志具禮零乍ホガタニモミナハナシシノレア  
玄門皆因報せさるは一時あられの爲て流きゆふもきが今  
くく獄出も絶の其こそぬまやてもくれのあそび云

ひてさくおふせらせりゆうじいも、か紀  
也紀氏の寺よ取れくるをみらめりもは、縁よりおゑ  
ちくたまるとあまに似たり松井の霜はきて霜れぬ  
もとすよるる一翁のそとわざくねふをほづ  
にがくらむ色をは出す。其筋文也深一やう一感  
あくはして藏てを織く懸る事とれとお深ん。本  
トヤクホキをあらじ大やう跡なれ類ハ織よとあ  
物トヨウキトシナキは織得事をすすせく織  
ちいなきもの織てなく、あく似たり閑の小川よ締  
お門うく菅代小屋よ締ねやとくがとのお皆織といあ

きよく織る言あらよ冰にやつて織きてなぐそ物を  
なぐそく其うら立へばきい然い。物をあくにらと云  
毛団言也其外織よ織出ひなまうとぎ出そくちのと音か  
ふを思つておこやうきてなぐそ只織事をよやくと云  
なぐそく織くよ全く月一神奈月ハキ時節を舉  
るのとせきを長月のすくわく論なく秋に入りよまのう  
秋月とあんせ秋入ふなり。のねまのすくと冬乃  
とくひすりて春夏もまことに月一織あせまと付ふと  
おまえを家に置く當初ハ多か秋、おまえなうアヒ

神無月より放り方ニ謂半やをされば、もうや時節ノ用  
まことにハシメたる事無事にて、秋無月ハヤ、財無くつらん枕のに  
うきなきよはる方より、秋終ニ神無月あくれもすまぬ  
うなぐよなごのあやまらひ行ふせや、此すむと長月  
のあくれのあくで、ハのてにせばうたり所度ニカのく一  
首はよて傷み事今してか、一山く是を六帖ア立田山  
家持集ニ佐保山ナリ、直一山は川足は城づくの羽小  
きがーとら、らよとら、らせ、山は城づくと、つ引  
谷ノと財毛れ深紫山がんま、冬の初うるえんハ山  
きくふくらすがや、況や秋のまゝ落葉比寄悉く出  
也

まかねだるをや

○お向小六帖は初向立田山とあや山まで、只落葉とすや  
落葉は専ら秋よりすや、是ハ多代初見くゆゑをもとと  
尺々て其時もす散て綿とアシムハ川ゆては城づく  
と云羽よくせ付くすと云るハ非也、山多く有とゆたアリく  
いづて落葉とすゆる今こそ深なす事とくうはれ  
川ゆてはよくせ付くすと云て山は城づくと、そん  
ハ常の事也、又久兵衛一ダモて財毛をちうとくうへ  
いづるを附てアキタ始め也、なるなど云ふ次めふ後世心  
也

○遠鏡小時雨ノ糸ノヤウナ雨ヲ堅横、ホニシテ機ヘカケテ錦  
ヲ織ルト見エルと云々ハ非也機ヲ織マレ布ヨアモテ糸ヲ  
やどヤ成ニ全糸の名也幡旗などとの數をも計てわ色  
あきハ糸を様ヘテくろとはキヌラモクハ云う事也  
ヨリさくら事あんすわキヌラハうきくたる社ノ事也  
ききおやくとおうどき、謂きなく語意さへよ近き  
事也

冬のうぐいとてよぎる

源宗于朝臣

山のうぐいとてよぎる  
木のうぐいとてよぎる  
水のうぐいとてよぎる  
火のうぐいとてよぎる  
風のうぐいとてよぎる  
土のうぐいとてよぎる

意ぬうぐいとてよぎる  
妻のうぐいとてよぎる  
女のうぐいとてよぎる

題一  
よみぐいとす

六文月代一清ききはうきうきあうきの物アリとす  
之の向新撰まつ六帖朗詠等より裏けきはうきあうき今清くまつ  
うきは謬せまつより裏景此情をみてくよりの事す古今

一首の冰なる

タされハ衣みさそりみどりむけ吉野の山よみゆふうき

此奇於本よ三吉せれ高木の山よみゆふうき

高山かくんとみて氣疎く寒ひくらそする今ハ彼優な  
方小直トキもゆくへら取角ト三吉せれのよけ山のさく  
う花がくくにうきく此ゆふくれい寒京小ハ高木せ山や

ふくよかうん万葉より吉野之高城ノ山余白雲者行惣而  
棚引所見なとあやて高山なる事ある。振頭注常は  
三吉野の深キ、豊山とあれど、崇徳院の所本もたゞまう  
山と仰歌とあり是にて是此、うまく四句を吉野也や  
ゆくふる本ハガクアリ也。葉ももみゆき、豊山ハツツキの山  
の寫誤にて、まくすと差引也。ひく寺の意、行もあれど、此  
書ハサク詠ひ、寒代改めく吉野の高木山ハ雪よ社あ  
まくすと、序ノハ初向タモテ、今宵あくのこうも也  
今モ寒代冬モあくまでハ今秋小山ハ雪なス。大比叡愛宕  
白つんなどいふり、冬されど、只メハヒ、うす其意うハム。

と言のゆう下すや連承、とすくやもすやちあやう又々うなれ  
せゆうすゆるあらうやうく此諸の意を其方々向く推定  
じる。非也後世すハ謠ふかね謂ふかねうの本意を忘きて  
或ハ謠ひゆく或ハ詠(ほ)めく後急宣すや歌きこそのをそくよ  
平言の規則をそ推すと、ヨリヤウヤウルも差引を出くる也。今も語  
勢はゆうやくよやうつるや殊々寒一とすく方すもはなまく、  
かの自然とく語意外からぬかれ也。味つて、文衣を寒。」、神  
乃の用あらむの傳くまく、とく風きよみて、ノハ役寒  
とも社寒ミナカト、常よりのひもとて、衣や寒や衣や薙き  
う折うちせざるもハ以く差引

○井岡よりされなくすなれど云々井岡へ云うれば此頃を  
あやまる人多くもては委々と云ん是ハタゞアキハテふ朝  
也云々とくもくへつる事共皆歎也まつたゞあれどタゞ  
あきハ井岡へ言ふるハヘヌ事ナリモ思ふれどタゞ  
ゆくとんを喜す一あきハ岡ノ一あれども云くうふもや其  
處へくら語とくがた万葉ほそとづくんづくとく其のうけ  
をもくしてへゆる也取委ノヘヌ事ナリモ思ひ

○遠鏡小此ヨロハタカタニトハハイカウ寒イ云々コレハモウ吉野山ハ雪

カツツサウナと云ふ能也くは万葉ハモテサムニタマトノ暮去者衣袖寒ハモテサムニタマトノ之高松之

山木毎雪曾零有ハシキコトニキソリタクとあらうと云翁曰くして一夕のをもよあれハ此  
夕とも云ふとあらうとまつ紀也せしもハ夕方ハシキなれど連承すの  
事ハシキあらうと云ふ能す連承すけさも内ハモウツツサウナとゆふ  
とゆふ始すフルサウナと欲フルテアラフなど御宇ハシキ也

今トアラムシテあらん家宿ハシキもとき行ハシキるもあらまくと雪  
のさ今トアラムシテあらん家宿ハシキの枯木ハシキもと  
押ハシキなむと雪ハシキもとき行ハシキるもと云つて待ハシキり初雪ハシキの事ハシキも  
しん其ハシキうき見ゆらすとあらうと雪ハシキをつきてとれハシキりよて  
の霜ハシキもと雪ハシキもとき行ハシキるもと云つて今ハ好まん事ハシキのりあらまくとも

雅俗ともつかぬもの云々今古至りて用意あるハ自然の事より多く語言の常也

とくをうなづく　海をひらめく　消ゆるはんぐるの  
ほのか　城を云山法なると住人の可也を消のきぬ  
けゆるを後や解するなり因数あらう大やう常なるだけ  
ああゆまい津力あると解ゆるゑもるはと云り  
とてよ天さへゆく　雨雪あらんとするせは風は感  
河海すとすれ勢自然よ譲て鳴あればさるを一時逆流と  
雪解のあよまどりてあやしむ方よよみがたきあそび

ヒキノヤマカハノセノナヘニユソキカタケニクモタナワタル  
引之山河之瀨之響苗谷弓月高雲立渡ナリトヨウムラ全く其事  
也山の瀬は山河谷川もいすゝ月一ちよづう瀬どハ當初多モ迅  
瀨をまゝてエアミシテヨリ多モ中止ムと瀬どエアモ多モ水をよめりあら  
をもくゑんべ

○遠鏡よ山ハ雪カフルヤウスチヤカ云々ソノ雪トテ見エテアノ山カラ  
流レオチル川ノ水カマニテ音カアレ高ウナツタムトコロは那也アハ  
音リ今あら音ヒ此アラ雪ガナホシム音也山ハ雪カ降ヤウ  
スキヤナムト椎モウドハノン音を只傳雪けと云くゆのゆ  
人や又山のそきは歟山河の深ナム事繪ガアノ山カラ流  
レオチル川、水ナムイ方山を離れて流ムハノを此御

は然とよつてよきがんや又山ハ今を察かんとするす  
やう々忽其舌からぬくさだる川のあそき音アリて  
高ひまで至るアソんや音も頗るれ叶ハまつむれ也  
川より葉なづむ山の音またあつてゆふる  
ちかまき此川の思ひよしむをさら葉の流き事より河  
より奥山なる音だけのあきせ頃またやうさんと云ふ上の  
立川の一時比又推かつきる秋の歌ひよもあくやまき  
ヨリ細流と際りこれとよくとをなく歌ひやアシテ  
水中とあつるハ程アモ其色うす却く濁色のうつおて  
日とまれるがよもよこは甚都より風と谷めらうり  
カ

アキハルトアリ同一音アリて此川よりい奥山とうけたてに  
アキハルトアリて歌ひうきさる音アキハルトアリ梅津うす  
川流うき音を聞ゆかんといひあくちよていつは立川の歌  
音をくれ生を毎れ山陰をちむくつ如一其實ハ改めく近ヨリ  
卫門くより散みてあわせまつわよまう山陰の見  
やらきくらはれ共の云ニ上よきう葉なづむ時節アリて  
云は其山脈其山中よりよきう葉なづむ實は其山の歌音あくへ事  
論アリ又時節流きんぐ今アモ音をひきて、かくまく秋部  
アモ今を音の水を流すくわく音がすの中アリ其語

お全く同様も前後の頃よりやう時とて河まで冰峯の遠  
いはくもを過ぎて（うち）然るまうす山の氣象はくわうて流  
きあん其筋を推すやそきのあす今またきくとやり  
なく、この之今も此川あれゆきをばくよれすは根の  
まへ今の崩れ人防保山今もあんなんの今まく此のちを知  
や靖々の意

すむ者せば山へもきれいに見えぬ日もな  
ずの意明らき。勢諸には敵の山へ巖すまく、雪ひと高一丈を高  
きもの多くさう山詫ひ寒き京、すまくつまく一丈てよき清ら  
きあらわの旅館の事を言ひて古里をゆくをうたはせのやう矣。

卷之三

やつ宿をすこやかにあてたまはりあくまでそのへりをわれ  
お庵は只白妙、雪あらそもて一鳥此時をなほ書、紙もあ  
かてますふ来てき人あらねども也向きてふ面白うる（下四）  
殊更よとひまきを思頃入らとまきをまへうるて新しにちがふ  
きうすあきそろをぢと云あらせまに却く深くねむれ  
しにあまくまゆるをあふてくわうちもあらそもがてとももぬつけ  
そとふくまゆるをよせばしきてれあらい敷のまよ一面  
諸ももれをもとくあまやうせなづつてる弊きをもとくひす  
ら様もまく酒をつきるあらは枝は高く重なるまく里

様の差別あらずもとよりはうら様あるも  
又積ふとつてもまも外がくぬ物から其を取へるが今、  
まことにする所を云也はつてとてとてとてとてとてとてとて  
のほへききやあらゆは交りて一相はへやあらむをかん  
孔氏のすゝよるなふ月とうえ申。我宿の庵白妙ノ原  
をいわとどくおへり一重ともうやうやうされく衆石草樹もす  
こゝ其儘あらむと月の影とく見えずとも見えてさ  
かづくる有れのあらゆは只あらむた網によらずとせこまら  
深くはあらゆるくせんや今あさへるもあきをなへ  
又深くはあらゆるを推くか「此姓氏の寺を後撰」は序はむ

手拾迷々ハあれら白雲と直々くテアリまへ入るもあ  
秋の残ぬれ今サアリハナリセヒトアリノ朝ニテは  
うやめきらうある事とは皆まゝれきりん寒氣事也  
○余村トアヌ事トアハ道ノキノモトス人のがきゆゑよ  
ハシモツヨシキモナムモ積里果トウモル遠遠尔  
キノ庭ハイチヌニ雪カツモツタマテ道モナイ云く通ツテクル人カア  
フウナラセメテ道ハシレテアラウニヒテテヨリ耶セコハ游  
スツ積立方ノミタハ入道ガキニテ欲きりヒセヒ  
ハ只頃のまたに脱去く情京セ失ヘシもの也次ヨ白雲氏而モ  
テアリトキナムニテアヌモ済リモカムモ皆敷の玄

をかくせらる自其其方の事よりみゆきるの物  
さきの前もとほりすりめを又もとほりがつて今も  
雪ふりてとく更に通すには非す只ゆふ  
まこととんはあらうかふを云也

○寺閣小引すすり雪は候り果て淋しき宿也あくふ重かる  
言也云く後世あくは下すもあはれとち修也とくへ  
は非也あきあくは其をあくたの事もく即あざりと  
云々類の字をあく且まき重がき方よや或ひも或ひの(或ひ  
わづひ或ひひづかむ)もくはひく黒敷及如の字あ  
と守すはせきくわのうで今ハ即敷の意もく席をあく種を

しく或ハ枝一き全ノ枝也云と向言也重なる事候う事と  
のものいともとく却く候う事とく

冬の事とく

紀實之

雪ふれは冬の事とく本を喜びてあきを思ふ事と  
斯の如く雪ふれはつまむ冬本冬事れ枯れてもも喜ふ事と  
て花咲ひて事とく事とく芽くじを待くつて咲ひき花の次と  
をあひて私に喜ぶ事とくあられぬ花とてすまく冬物  
を思ひながらあきとく事とくの枕なり事論が一さる  
は其芽内にそもて教出さんとするをつまれるう事とく承る  
うれの事の事とくの共の事とくくわる事の肩こり

なとよ詠の意を今切くせんの外なる所をこれぞ  
はる冬ハ閑居する代語よりて極き板の意より  
もとよりふれ枕がまきをもつて此すがとす冬を  
やきる所と本から收歛の方よりそれく後の意也次なる冬  
枕がまきうきぬをかきを用ひてかどりと枕うき非す  
にはゆう引説ふなまのこゑをかきと幸也語ひむ  
しよく其意をほなうをかきとばつて此づれ收らむ物  
がまき地よ形ちをかす方、やかまきは自然一意よ萬物を代ひ説  
えれ諸二行あられ也

○余材小手本代葉く其様の根よもじる心也とひす開

よ冬鶴ハ霜雪す壁すをのこつみとらるハ幸せも／冬を  
閑居とくまのぬれぬ肉、馬をせつみ也と云ひ其事非也これ  
ら當時の名と後とはきてあわん事あがてん冬鶴を一川  
よもづるは殊事也え来りて御即ちうつる幸うてこりて  
かやわりうつくしくもやあつて御也され古のハ鶴を  
すすめやくせんの意あれい直す冬鶴もとうやうて閑  
居を容れ是を弟の冬をもれう時節とく井戸もる也  
とくの更よ古の意なへんや或ち人の寒氣を要れく閑居を  
あの方に思ひかせらなりと移してはさの云てん古事記傳(ふ  
幸うてふく遠一

志賀の山うえよくとみる 紀あまみね

空雲れどもさすにあらそひのくわすめく花とくまれ  
あく雪は物を残さぬは一きは嚴すら見る花とくまれりゆめき  
といふ何があれと花はうとじ嚴の殊更とくもある志賀  
の山路をつづく形容をうかがは諸抄草本の更に嚴すら花  
等くとくと細くは季へうに嚴すら後花あやとくしゆくとく  
てきとくより其義ハ二門すとさく花ともさくとは其細  
二門なるれ差別あや嚴すら後花とけんきい草本とくく嚴  
すらく花あやとくしゆくとくみゆく也嚴すら花咲りい草本す  
わぬ嚴すら花咲りうとくすら後花とくとくするとく花をく

終是則

やうの山うへむ雪はくへなまじくかやとくもく  
寛平所時きのいの言れ奇合のう

あらゆるおとせ

浦ちくすくむ雪はくへ浪のとくはすのうとくもく  
澳の大空とくへや浦をくはくとく雪はくはす傳てく

富良のあら松山をすくいさもつゝ足ゆめやとく、ふ室中より浦  
うかくよ降下る雪は城の海岸に碎きしる浪のまづひすうす  
船もふとひよそむる也、まくらゆく海のねぎやまく  
近づく海上の行き今一に向つて、ちいさく又絶句の名ふれ  
歌本又あるよ遠ふ魚、密勘すし不審だ、とあれハ古本  
これ然り、如ト今、やそとのつづらや重うの格、歌にて今を  
もふとぞもその中に謡也

○遠鏡小今ルア海邊道イ所ヘ雪ノヲテアルナニキハ云々とハタハ那  
也海より降ぐる霰ミシテ浪ヒハリトモテ、外より海の内  
ハリ洋々とあくびまで、其をさきうるもぬせうるもぬせ

幸之冲(封)、廻廻の名まで今、其海より城をく降くる也

壬生忠峯

二吉曾代山のへ、雪あらすて、やまと人のれりもと、若ね  
玄のうきくたあるきとく、一まれとくれんとく、趣おきつせす  
真言すがなす、す、次、起、まつやせ、かんを、行く、云、家す、ぬ  
年、来ゆきと冬草代枯す、人、おとくもと、とある、歌ひは  
時、ま、事、あ、と、よ、く、と、す、と、け、る、かの、す、り、ぬ、こ  
あ、と、く、と、れ、也、役、勘、を、ゆ、つ、一

白雲ありて、けり、被る山、ゆふとし、人、(や)わりのゆく  
山家の情を、ひひやかと、うそて、すの、意、くき、おきの、も、え

そのうち門の詔とくそひやうどひまゆふなど云の類ひす  
きん今ハアシテ諸なきのた、トムシタラテキムハモ  
シテモ也古ふんをやりて教味モト

雪がやさしくてよさう

九河內之孫

さあやくぐるのうつみたれやもくともくとあわん  
お向ふ是ハ寄キと云ひものすそで本多喜之也云々この物がひ  
消尽もよせまく其をせりこれる道がほゞやねもあく  
ありい清々んと云ひておどろくは只迷惑の奇遇れを  
のゆきをえてと書ておせしにへくがくらくおのじうれ  
よよかのよもづく其實を生むをまざる也あくともくえ

をもと量る事。そぞきとくらうの如きぬ言されど必ずうそ  
その極やつぐのの猪とくねくは只詫なぐそくとがくとま  
うぬかめ也後も貴もつがとあわへ

○遠鏡小雪フリニカウシテ居ル我心ハと云ふ所也よハ皆壁塗ムテ  
雪の上もあけづらふわすわとくもんがくをむずての室京  
もつきておくハ若志よくもじれ也

冬、なづの紅葉や花のあくびはそのあくびはまたよやまん

おの本よ海うきよてよか手  
はゆき

冬うりやふひうきぬを、みよより花もみて、雪うぬりうる  
のうる冬うるうて、れくななる木のうすや花うるうるうる  
うるうるをあらうきぬとひよせ奇遠鏡絶景アリ

風雨うのくまうまうやかうるめう雪がうきうきうく

よみか

坂よされのヤ

わうけうの月と、うふまでは吉せの里、あまく、あく雪  
この奇景と、春と論じ、もきよ遠鏡、朝うきは、  
朗明の川すよと、ゆきは

類ー

襖へーす

きぬうう、よゆう、よゆーけ、お、え、そ、うな、は、雪やね、う、こ、め

此雪の消ぬやと、又はあうなん、辛夷で、やうく、春め立なん、  
大やう、序つじ事も、な、ゆーけ、ひ、く、に、夕人、事、それから、んと、云春  
立、す、け、を、も、う、な、ま、う、と、云、ふ、や、を、す、る、う、ま、ひ、う、ひ、う、  
ひ、あ、ん、う、や、と、こ、け、春、め、立、う、ふ、を、失、夷、う、る、ま、よ、一、そ、し、ゆ、  
う、ひ、う、ま、ま、ま、ま、い、と、ひ、ま、や、い、也、こ、は、一、朝、の、夷、れ、西、向、き、よ、櫻、そ、此  
雪、う、う、雪、ぬ、ま、小、斯、の、か、く、や、そ、あ、り、一、け、と、云、う、て、櫻、ひ、ぞ、  
て、消、む、と、あ、き、と、只、言、を、惜、し、と、非、す、新、一、時、の、シ、一、き、を  
き、も、く、天、じ、本、を、頼、ふ、也、因、れ、こ、う、え、ち、と、受、こ、う、り、其、玄  
き、う、一、前、今、う、行、き、て、あ、う、な、ん、我、宿、の、薦、た、た、う、  
あ、る、宿、あ、う、ある、ハ、初、降、る、を、う、う、一、み、く、今、う、

よりあらわんとおの今ハ既アヨシキをあつちやくあ  
エヌ事ニキトシテ全く同一情意なるものう時節の前  
はううて詔詞の援手モニキをす矣

○遠候小此雪ハタキエヌヘモ又ソイテフリカサナレと云ふ  
ハ非也。には只津宣ゆきをかづ、あまきる事既ニ無となり  
此きぬよはへまく漬果ぬ内よのをまく速くもひと  
もく方より、やまねうよすれかずのそれなど、ある  
とは若ひく又そのひもあとくすむをつくさせ  
梅花うれしも久くにえよせあまびるをれなぐふきくハ  
このつゝある人のまくがのせり今うつ奇也

寺の意即ち寺ノあよきするハ寺のうよくある事也。寺ハ  
てあるれなれ、謂のうよくあるの、只推なぐく白妙の御  
しよキとくさや。遠候。おもむき代詞をさへまく  
解きる言を得て、うつ奇也

○打向小此寺ハ或人曰柿本代人毛の寺也。とつてうつす  
是を實にて推述する人毛とてへうち云々亭上姓寺  
成毛部入れりて。某桑りは梅を多く冬によみやう  
て此集をうつす。也と云ふ非也。此寺尤古雅す  
くもやいとよそのつも或後よりてうく祀されん  
を要する人毛なうすと推定せん。其うにや又某桑り

ハ梅を多く冬よりかやどるを受らます凡万葉中梅を  
より多く有百有余首及て其内冬に付は十首よりまづ  
於考へふ多きあつれども三四首をうやうすと付す  
考へよし合せき、冬なるふくさのうやうく其の秋  
なづんをすりとえきをや多く冬よりやまとづらは万  
葉を下へてゆくのひと言也

梅の花を書むあれとぞとぞ

小野空也としわ類

花の色を書く所を以て冬ともいふて人の多くて  
考へよし書く所を以て冬ともいふて人の多くて

冬十七

はのうへうせ香ひを匂ふと云ふをもとよりは綱とののうせ  
考へよしとひのうせをくふおくれ考へ紙のふぬすあと  
用一本がくの香を匂へば今俗よ云なれさるよりく  
きくちせよ

雪のうへうせ梅の花を下へ

小野空也

梅の事代すやれなき香ふゆひがせれくくひてをほ  
そのかくせうけひを雪ふやうそんがくふ紙はうれとゑ  
きて折ふ更に梅とはよま枝くんじゆゆかくらば此頃  
の諸よく難かすも晴ああむれども松の葉れども万葉

凡もしくは事事よりれきのをせとく今それと云  
よ粗あくももと秋水の秋の落葉とくもおけりとある  
も於ハ摘楓ハ楓と落のそ終くよ庭にて色を施すとそ  
やまゆ也紀氏の集よ桜花ちくね松よりたかく見色とく  
よ見ゆせをあんとあるも松の緑桜の花子もく面白な色  
をとくとくよ見ゆそんとそのをと桜代あそびおを惜めらるや  
○余材よ梅うまればいわむする香ようりやとすみ  
さはと云はれ也とはとむくく匂いもゆふものか  
あつと只香れりちくまきをいすとかもとやと匂いとほ  
みふきのゆ其とくりりと行ゆきよあす今雪

うりやくなど云ふ奇のよすやくぬ事代うたくじりと  
うしらふとくは六帖よ此のをうりせよとあるより熟  
ひくとく

○寺間小是ハ雪代核きるは花の咲くる也上代奇の花のよす  
雪代核くら也仍くよハ雪をゆ一やてとつは是ち降れ  
きか雪とくの此間か一くやどと云ふは非也よハ雪を交  
きてとくが吹き方よすと頃すも梅の花よ雪のよすもと  
いれ今ハ雪おきよと云ふと今雪雪なりぬ事もとより  
がもくは雪の事代梅をと書て後深をとくのを雪と  
花との前後すくをもくときかなくは咲くるよす降れ

もやくうらむかくへうらみか幸也やうく次の禱書、梅を  
ひそめ雪れども云ア幸えハ月一絶を厭(ちよひをきよほ)  
く少(こ)づのきらりを書きりつゝ也

○遠鏡(とんきょう)を清くすみの罪也打開(だあん)すとてゆ  
下を獨(ひとり)は奇(き)便(びん)也と云うよきが(や)まくとて調(しらべ)を控(くわん)  
ハ語言(ごんごん)の道(みち)非(ひ)そ況(いかん)やすやこゝもやまくと  
くあとくへがくの初(はじ)も清くすみ皆(みな)置(おき)れどもをあり

ゆふれすアタマをきくとよも

紀(き)と母(おや)

雪(ゆき)は本(木)とみ花(はな)は咲(さく)ぬ、川(かわ)を梅(うめ)とみてぞく申  
物(もの)すやけふ人(ひと)を従(とも)ぐあらひの川(かわ)をやまとよめ

冬十九

ヨリヨリこの年(とし)はきみと冬草(とうそう)はよし人(ひと)に別(べつ)きとあす  
仰(あお)ぎのけどもやまと只(ただ)歳(とし)の事(こと)なく次(つぎ)年(とし)はそとああ  
う(う)すきいたるをきくよもとをばくとくや、とひで妻(め)くも歌(うた)  
夫(め)をよしと厭(うらみ)く初(はじ)も年(とし)は未(み)だくうさんをのむ従(とも)  
る人(ひと)別(べつ)き一(いっ)ゆくと使(つか)ひすと云(い)ふ幸(さい)也本(木)と  
云(い)ふ川(かわ)の久(ひさ)き事(こと)ある冬草(とうそう)は枯(か)ずの枕(まくら)の付(つ)け  
物(もの)を用(もち)て自然(しぜん)よし細(ほそ)きが(や)まんゆうと今(いま)こん年(とし)を打(た)

うきく事ぬと云ふ常とも云ふ事にて、ようやうに  
は人にてまじい其人、まぐ門に入らずといふ事も  
見えんすら來るといひて居ります。

辛のいふよみか

立原文庫

うみの年代をさりながらて、書を記せりゆりまくつ  
寛平御時ときの内宮の寺合のう

よみかへ

雪あがく年は暮れ时、しづくのまじぬ松を尺々  
雪あつて年は暮れ时、しづくのねいづく  
てり色の裏うぬどり年はあらきそれと云嚴寒、然後知

冬

廿

松柏之後凋也と云をあそびよすやうは嚴冬に寒氣に遇く  
かく小凋すぬ草木をなきこそ松柏の獨後もしく立殊れら  
かく松を云やむる寒氣を今ハ雪落くとよ一匁もきくせ  
てそれやうく松のくよとされとつゝみよとせつりよ  
きくらぬいたひと凋きぬけり小移らぬなきよとおも  
秋翁のよじ陰なくせくら、数うるお葉り、ううりいゆくを  
なきれお葉もくを育とすふかみくらば根も只冬枯れ  
をえりてさるをば中、わ松の名代考にキムと云のと即  
苦多はけひるの松も見てよりやうとあひながら  
入をひる年へ

○余材より霜の材をすぐしてねをいりて手どり  
もとくらむをうきなれどもといひ遠近より今マテ露や霜や  
時雨カラテモ松ハ色カ、バラナシタカソレモマタ此又雪カラタラハモニ色  
カ、ハルテモアラウカト思フタカ今此ヤウニ雪カラツテモヤツハリ色ハカラスニ  
ちいさな非也よ年代後すがくまくまく雪し我代わどくかく雪  
ハ歳暮物にて彼歳寒を形容ちうまなまくハ雪降く年の  
きうとくまくまくわのよどきにてのこす雪とは非す  
文集ノ歳暮滿山雪松色鱗青くとある用意をすよとて山野  
に降る雪萬万のあゆさるハ雪降くと打耳する冰霜モコモ  
とく自然松をすよとく滑るや霜霰をまくしては雪  
難解れぬれど

ゆうれん解ふ事と云事を只言語ふと云へどんや又霜雪  
時雨やとくらう来て此と雪ふらハナリカクもくとく  
意をもやさむハ言はて年のかきぬる辭ともを言ふくせに  
りうち松や安ア上下をいじの半くもの三方をゆめ  
難解れぬれど

とくのとくとくとく

とくのとくとく

方をうつてあそく川すれどく月日れり  
去りゆをきみのよ當れぬとくのあんつをあそびと名はせく志  
うかく者一としてくる年月の只走り速くもる事よと  
省うつてはく今もつてはく明日うつてはく

と云其いの語をもちといふ所に  
を今より原へゆてその二句より御の跡の跡  
すら曾青川より移してやつて其流をもく流をもく早き  
あいあらきもくよせたゞやお向よりもと云うまで  
流をもくは常れ幸なれどかくうかく云流れ  
きるは稀也といふ事アキの言只先ほの迅速なる  
を歎もかなひ以てり有字を歲暮小説アシテ  
其感深き者也

守護れと仰る事一時の續く事にて申ゆる

紀門

行年七十もあつ新車と寝下る事まであるが  
ゆくの、いつも情をよみ寝よるが新車で一行くね  
きはとやくれぬと云ひ只ともねれりと云ふ事ありて上  
の枯ぬと云へり又円くい、暗くする事多く、或は圓くが月  
にまくを度して多くなる其余圓くれんぐもなとの類いも  
ひ明より暗ゆくの称也年光のうりはうり暗くが月  
のあらゆく月見鏡のうりは鏡うなれは是れくろと云が  
ちく老衰人の歎乃終よそその理うるし物、うるいと云  
よや受てこれぬと云ひあつ新よやうくくられぬらへと説  
がの變り行を考ぬといひ乍れはきの跡を家集に載

よ病ハおきとせ葉せ花人の歎をくもすすみのくる獨れ花ちくす  
行ひも嘗なれい寧のきくれぬへうぢやあむじゆらは新と云ふ  
うなずれんくよく耳す。おの聲をつく打まセくくらく  
うへるはれ氏一家のけいさくとく外よハをきくとくほ  
教改のうづのとく承けり幸もくれぐれもあひかづく  
事うどそらあはく我身をくまと云ふ全く紀氏をまわ  
ふ也。

○遠鏡。年ノツモルニシタカウテ次第二鏡テ見ル影。テカツムリ  
カ真ツ白ニナツテ面ハシワカヨツテ此ヤウニオイクレテイクト思ヘハト  
云ハ非也。往年の情くもあそぶとい我身をくくれぬ也

云々更めよ。語調を尽き。は光色のや、あくられをもと  
整ける。成一本の書で老極ももと新。は非。此集  
奉進。在西四年。歳も。もと小字。そ由のとて作らむ。  
財をも。あるや。もと前が。今。文集。白髮雖未生。朱顏已先悴。と云  
う。白髮。りよ。今。文集。白髮雖未生。朱顏已先悴。と云  
う。白髮。りよ。今。文集。白髮雖未生。朱顏已先悴。と云

香川景樹大人著述

新學異見

新學異見

結

大沙河  
中堂子日記

中空乃日記

中空乃日記

百首異見

百首異見

百首異見  
桂門一枝大

桂月一枝大

卷之三

同人拾遺前

同同拾遺前

司馬文正公集

古今正義總前

古今正義總

古今正義總

土佐日記創見

土佐日記創見

土 仁 日 言 簄 具

萬葉集據解

萬葉集探角活言考

活言考

活言考

卷之三

卷之三

大ぬき中

火  
ぬ  
き

卷之三

一一三五五三一二三五一一一  
冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊冊

同既同近既 同同同同同同既  
刻 刻 刻 刻

卷之四

# 東塙塾藏

嘉永三年庚戌春發行

江戸 須原屋茂兵衛

日本橋通壹丁目  
芝神明前  
心齋橋通北久太郎町  
三條通高倉東工入

## 弘所書林

同 皇都 大坂 河内屋嘉兵衛  
岡田屋嘉七 出雲寺文治郎

萬葉和歌集	同拾穗抄	同全二十冊
同山常百首	本居太平大人著	同傍註
同堀川院百首	中大本	同薄摺冊
同治良百首	中大本	同上葉摺冊
同歌伊勢海	全三冊	同上葉摺冊
同十六夜日	同記	同上葉摺冊
同源氏物語	小大本半裁本繪入	同全三冊
同評釋	萩原廉道大人述	同大本半裁本繪入
秋夜長物語	同	同
和歌御書物所	京都三條通塙町	和歌御書物所
出雲寺松栢堂	同	出雲寺松栢堂

